



あの山の
彼方

小池トミジン

緑、緑、緑。

一面、ぼんやりした緑色だ。

濃かったり薄かったり、ちょっと黄色や茶色がある。

陽介は目の焦点を合わせず、ぼーっと山々の方を

校舎の3階の窓から眺めていた。

ぼーっとして、なんとなく家でのことを思い出し、

父や母がいつも口を開くと命令しかしない事を嫌な気分思い出していた。

『どうしていつも一方的にしか話をしてくれないんだろう。

学校の事や友達の事、くだらないことも話したいのに。

あれをしろ、こうしろ、早くしろってばかり言われて

・・・つままないな。』

本当は、親子で もっとふざけたり、冗談を言ったりしたいのに・・・。

ふと、キラッと光が目に入った。

「あれ？今のなんだろう？」

今は昼休み。乃亜小学校はあちこちから歓声や笑い声が聞こえてくる。

校庭のほうからも、ドッチボールをやっているのだろう。賑やかな声が聞こえてくる。

陽介がいる3階の窓は廊下側で、裏山に面している。

教室の騒々しい声が背中の方から聞こえる。

その、一段と騒々しい女子のグループの中から一人、玉井久利子が

ちらちらと陽介の背中を見ていた。

皆の話に合わせて、同じタイミングで笑い声を上げるのを

忘れないようにしながら。

陽介は裏山の山肌にさっき見えた光を探し続けた。

『もっと頂上の方だったかな』

さっきの光はなぜか、一度見失うとまた見つけるのは難しく、

なかなか見つけられないでいた。

「ようくん、なに見てんの？」

兵冨 翔（へいほう かける）が話しかけてきた。
陽介と翔は1年から4年まで同じクラスで仲良くなり、
5年の今、別のクラスになってしまったが、
二人は変わらず親友で、いつも一緒にいる。

「うん、あそこ。ほら、」

陽介は見失った光が見えたあたりを指差した。

「あの辺で何かが光ったんだけどさ、
ピカッて。

でも見えなくなっちゃったから
また探してるんだ。」

陽介の指差す方角を見る翔。

「ふ～ん。」

二人で並んで山肌を眺める。目を細める翔。

「あっ！見えた！」

「えっほんと？なんで、かっちゃんだけ見えるの？」

「目を細めて少し目線はずすんだ。
こっちの方を見てると、
目の端っこに見えるよ。
ピカッピカッて点滅してるね。
なんだろうあれ？」

翔のアドバイスに従う陽介。

「あっ、ほんとだ。
また見えた見えた。
ねっ？光ってるでしょ？
なんだろうね、あれ。」

「不思議だな。」
しばらく眺めている二人。

「なんだと思う？」

陽介の質問に、考えながら答える翔。

「うーん。なんだろう。遠すぎて全然わからないけど。
木がいっぱい生えてる所の、木と木の間からちょっと光が
漏れてるんだと思うんだけど、
カラスが光る物を自分の巣に持ち帰ってそれが光ってるとか？」

「他には？」

少し笑って、翔が続ける。

「まさか、あそこに洞窟でもあって
牢屋に誰かが閉じ込められてるとか」

「SOSの信号？」

「でも、モールス信号じゃないよ。ちゃんと見えないからかもしれないけど。」
翔の意見に考え込む陽介。

「行って確かめたいな・・・。」

翔もうなづく。

「うん。気になるね。」

「でも、あの山は遠見山まで繋がってるでしょ。
遠見山はよくUFOが来てるって噂だよ・・・」

真剣な表情の翔に、うなづく陽介。

「聞いたことある。テレビのニュースでもやってた。
一度、遠見山の上に いっぱいUFOが目撃されて大騒ぎになったよね」
二人、声をひそめる。

何ヶ月か前、ある日の夕方、遠見山の上空に光る飛行物体がいくつも目撃され、地元のラジオ局、テレビ局、警察署や市役所に目撃者の電話が殺到し、電話回線がパンクするという事件があった。目撃者は数百人におよび、地元では今でも語り草である。

翔が固い表情で続ける。

「うん。僕はその時ちょうどラジオ聞いてた。大勢がラジオ局に電話してきて、電話回線が使えなくなっちゃったって言ってた。大騒ぎだったよ。『皆さん！落ち着いてください！』って言ってるアナウンサーが一番興奮してたな。」

「あははは」

「宇宙人の秘密基地があるのかな」

「だとすると、あの光は・・・」

「宇宙人に捕まってる人が送ってるのか」

「それとも、宇宙人があそこで何か作ってるのかも。新兵器とか宇宙船とか・・・その作業中に何かが反射してるとか・・・」

ごくっとな二人、唾を飲み込む。陽介、さらに声を小さくして

「確かめに行こうか？」

「えっ？」

「気になるじゃん。」

「そ、そうだね。」

でもさ、あの山には
て一ちゃんが・・・」

陽介も「あっ」と思い出す。

「そういえば・・・」

『て一ちゃん』とは、矢倉山から遠見山に挟まれた神振山に住むと言われるじいさんで、子供達には恐怖の対象だった。ほんとか嘘かわからないが、

子供を何人も撃ち殺した事があるらしい。

猿だと勘違いした、と言いついたとも言われている。

時々市街地へ降りてくるようで、目撃者も多い。

だが、いつも独り言をブツブツ言っているようで、あいさつしても怒って殴りかかってくるという。

そして、ショットガンを持ち、犬を連れてよく山を歩いているそうだ。

「て一ちゃんはやばいな・・・。」

陽介も翔も、遠くからて一ちゃんを見かけたことがある。

そのときは、何事も無かったが、

ある意味、現実味があるぶん宇宙人より怖い存在だ。

陽介も心配になってきた。ところが、翔のほう徐徐に顔色が赤くなってきた。段々興奮してきたようだ。

「もしかして、てーちゃんに捕まった子が、光で助けを求めているのかも・・・」

「それならなおさら、助けに行かなきゃ。」

「そうだね・・・。うん。」

「よし。じゃあ次の日曜日。朝8時に集合してあっちの丘から矢倉山の山頂まで登って行って、頂上伝いに神振山へ行ってあの光がなんなのか確認して、何も問題なければそのまま遠見山の頂上まで行って、そこでお弁当食べて帰ろう」

「何か問題があったら？」

翔の質問に少し考えて

「事件っぽいことならすぐ逃げて山を降りよう。警察に知らせるんだ。子供が捕まってるぐらいなら助け出して一緒に逃げよう。」

「もしもさあ・・・、もしも、もっと大変な事だったらどうする？宇宙人の基地があったりしたら・・・」

「・・・うん。その時もやっぱり逃げよう。必死で逃げよう。その後の事はその時考えよう。」

「怖いけど、なんかワクワクしてきたね。」
顔を見合わせて笑う二人。

「ひiiiiっ」

と、陽介達が顔を出している窓のすぐ下から、悲鳴があがった。

「やめろようー」と、力ない抵抗をしている声だ。

二人が顔を見合わせて、下を覗くと、4人の男子がいる。一人離れて腕組みしたままニヤニヤしている。あとの三人は揉みあっている。二人が一人を押しえつけようとしていて、一人のズボンとパンツが引っ張られ、ずり下がっている。

無理やり服を脱がされているようだ。

・・・・・・・・・・・・・続く